慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	佐藤仁史君提出博士学位請求論文審査要旨
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	2004
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.73, No.1 (2004. 6) ,p.113- 119
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20040600-0113

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

彙報

佐藤仁史君提出博士学位請求論文審査要旨

論文題目　「清末民初江南の地方エリートと地域統合」

論文の要旨

本論文は、二〇世紀初頭の中国江南地方における地域エリートの言動を検討することを通じて、中国近代における地方政治構造の変容過程とその特質を明らかにし、ひいては従来の中国近代史研究が築いてきた国家―社会の関係の理解に対して新しい視点を提供しようとしたものである。

本論文は二部で構成されている。第一章から第三章よりなる第一部「郷鎮エリートの活動と秩序意識」では、上海県陳行郷におけるエリートの言動を分析することを通じて、二〇世紀初頭の江南の地域エリートが郷鎮社会という《郷土》からいかなる秩序を構築しようとしたかについて考察している。また、第四章から第六章よりなる第二部「地方の制度化と『政治対立』」では、清末以降の政治過程を、行政機構が地域社会に対して「制度化」をはかり、様々な行財政装置を導入させていく過程であるとして捉えた上で、このような装置が地域社会にいかなる影響を与え、また地域社会がいかにしてこれを取り込んだかという問題について江蘇省嘉定県なる地域を中心に考察している。

全体の構成は以下のとおりである。

序章
一　問題の所在―国家―社会関係の理解に向けて―
（1）地方エリート研究と地域社会
（2）政治参加と公共領域
（3）「地域社会論」と中国近代史研究
（4）清末民初の地方自治研究の課題
（5）構成と論点
二　史料―《郷土史料》について―

第一部　郷鎮エリートの活動と秩序意識

第一章　地方自治制と官民対立
―在地有力者の動向に即して―
問題の所在
一　江南農村部の有力者層と地方自治
二　清末地方自治の諸問題と秦錫田の改革案
（1）浮収問題
（2）清丈問題
三　民国初期の地方行財政と秦錫田の活動
（1）地方公款公産管理処と地方税制
（2）清丈局の設置と接収
小結
附録　秦錫田略年譜

第二章　郷土教育構想と地域秩序観
—『陳行郷土志』とその背景—
問題の所在
一　上海県農村部の有力者層
（1）一九世紀の陳行郷と陳行秦氏
（2）清末・民国初期の在地有力者
二　在地有力者の郷土教育活動
（1）近代初等教育の導入
（2）その他の郷土教育活動
（一）職業教育
（二）貧民教育
（三）女子教育
三　『陳行郷土志』にみる在地有力者と地方財政
四　『陳行郷土志』の教育思想—「改良」と「合群」—
小結
第三章　文学作品にみる在地知識人の民俗観
—「歌謡」をてがかりとして—
問題の所在
一　上海県陳行郷の士大夫エリートと「歌謡」
二　士大夫エリートの「知識世界」
三　啓蒙と民俗
（1）在地知識人の風俗観
（2）自治と民俗
（3）民衆文化と啓蒙
四　民治と紳治
—一九二〇年代、呉江県下市鎮の知識人と自治—
五　一九二〇年代、知識人エリートの民俗観
小結
第二部　地方の「制度化」と政治対立
第四章　地方政治と言論
—嘉定県の地方紙『嘤報』について—
問題の所在
（1）課題と方法
（2）史料
一　『嘤報』の発行者と読者
（1）発行者の背景
（2）読者
二　『嘤報』の形式と内容の概要
①社説　②要牘　③批　④地方自治　⑤徴税問題　⑥各界新聞　⑦各地の状況　⑧その他
三　地方政治と言論に関する若干の考察
（1）啓蒙運動と言論
（2）清末の地方財政と「公開性」の性質
（3）民国初年の党派抗争と言論
小結

第五章　徴税機構改革と政治対立―夫束問題を事例に―
問題の所在
一　夫束問題の構造とその受益者
（1）清末における夫束の構造とその被害状況
（2）夫束慣行の受益者
二　清末、夫束問題に対する「世論」と各級議事会の対応
（1）『瞭報』と夫束問題に対する「世論」
（2）各級議事会の対応
（Ⅰ）城鎮郷自治区の領域性
（Ⅱ）郷議事会
（Ⅲ）県議事会
三　民国初、夫束の革除と徴収問題
（1）夫束革除期成会と夫束の革除
（Ⅰ）辛亥革命後における行政機構の変遷
（Ⅱ）夫束革除期成会と夫束改革反対の動き
（Ⅲ）夫束の革除と戴思業の逮捕
（2）徴収問題と民初の地方政治構想
小結
第六章　自治・政党・行為規範―エリート層分化の位相―
問題の所在
一　「県財政」の形成とエリート層の対立
―夫束問題の場合―
二　民初、県議会運営・民政長選挙をめぐる紛争
（1）民政署の成立
（2）「県会風波」事件
（3）民政長選挙不正事件
（4）許蘇民の辞職と戴思業の逮捕
三　政党組織と地方エリート
四　民初の政治行動と規範意識―「情」か「法」か―
小結
終章
一　郷鎮エリートの活動と秩序意識
二　地方の「制度化」と政治対立
参考文献一覧

はじめに各章で展開されている論点の概要を述べたい。

序章の「一　問題の所在―国家―社会関係の理解に向けて―」では、地方エリート研究と地域社会、政治参加と公共領域などについての研究史を総括し、「地域社会論」の中国近代史研究における有効性を説き、かつ清末民初の地方自治研究の課題を明らかにしている。「二　史料―《郷土史料》について―」では氏が独自に開拓した《郷土史料》について解説している。

第一章「地方自治制と官民対立―一在地有力者の動向に即して―」では、二〇世紀初頭の中国における地方自治制の導入を

はじめとして地域が行政最末端である郷に組み込まれていく過程を、秦錫田という一地方有力者の政治活動を追跡することで明らかにしている。地域エリートたちにとって地方自治とは官権力の外側に屹立するものではなく、あくまでも行政機構との関わりのなかで、その末端を彼らの主導の下に確保すること、換言すれば行政において地域＝民治の領域を確保することをめざすものであったという。

第二章「郷土教育構想と地域秩序観―『陳行郷土志』とその背景―」では、『陳行郷土志』という郷土教育の教科書を編纂した地域エリートの地方政治や郷土教育における活動を明らかにした上で、その編纂意図やこうした教科書の編纂が要請された背景を明らかにしている。さらに、「改良」や「合群」というキーワードを手がかりに、この書が脆弱な国家という状況に対し、《郷土》から県、省、国家へと同心円状に拡大して全体秩序を回復していくという独自の構想に基いて児童に愛国心を涵養し、それによって道徳規範である公共心を植付け、郷土や国家に奉仕する人材を育成することをめざすものであったとする。

第三章「文学作品にみる在地知識人の民俗観―「歌謡」をてがかりとして―」では、陳行郷エリートたちによって詠われ、収集された「竹枝詞」とよばれる歌謡の分析を通して地域エリートの民衆観や民衆文化観を明らかにし、それに基づく社会教育への試みが自治や地域からの秩序とどのような関係を持ったのかを探る。識字教育のために様々な俗語や俗曲などを収集して編纂された『滬諺』などの書に端的に現われるように、地域エリートにとって民衆文化とは《郷土》への公共心の涵養を通して愛国に寄与するという秩序構想を拡大するための改良の対象や民衆教化の手段であったことを指摘している。

第四章「地方政治と言論―嘉定県の地方紙『曭報』について―」では、嘉定県における地方自治を推進する地域エリートによって発行されたローカル新聞の内容を詳細に紹介し、地方政治に持ち込まれた言論という装置が啓蒙運動、地方行財政改革、政党の抗争などとどのような関係にあったのかについて部分的な考察を行っている。

第五章「徴税機構改革と政治対立―夫束問題を事例に―」では、地方自治財政の形成に伴って自治を阻害する要因として認識された「夫束」という徴税慣行の改革をめぐるエリート層の政治対立と夫束慣行の改革過程を分析している。夫束問題には、行政現場における人間関係やそれを利用した「仲介」的役割によって権益を得ていた県や在地の下級役人などの徴税現場担当者や郷紳などの既得権益層と、自治諸事業の推進をはかって夫束慣行の廃止とそれによる自治財源の確保をめざす自治推進派との対立という構図があり、この問題をめぐって地域社会を二分する激しい政治対立がおこったという。

第六章「自治・政党・行為規範―エリート層分化の位相―」では、議会運営、首長選挙、政党政治など西洋から新たに中国の地域社会に持ち込まれた政治諸装置をめぐる政治対立を第五章で分析した地域における利権の対立という文脈から検討し、

新しく導入された政治装置が地域統合にとって有効に機能しなかった事実を「進歩」「成熟」「適応」といった価値基準によって分析・理解するのではなく、在地有力者の利権をめぐる対立という視点から内在的に捉えなおす必要性を主張している。

最後に終章では全体の結論として、二〇世紀初頭の中国とは、緒についたばかりの国家建設が持つ二つの特徴―すなわち《郷土》における秩序を回復して国家全体を強化するという方法が現実的なものとして地域社会に試みられたことと地域社会を制度化することで国家の末端に編成する動きが浸透したこと―に対応して、様々な《郷土》の論理が現われ、それらが国家―社会関係の変遷過程の様々な文脈の中で自己主張を展開した時期であったと捉える。それゆえ、二〇世紀初頭の国家建設は地域を国家へと有機的に組み込んでいったというよりも、重層的な地域が交差・対立する局面を作り出すことになったと主張する。

論文の評価

本論文の評価しうる点は大きく分けて次の三点にある。

第一は、氏が《郷土史料》と総称する個人の文集、年譜、地方志、族譜、ローカル新聞などからなる多数の地方文献を学界に紹介したことである。氏は中国大陸で一九八〇年代に編纂が開始され、九〇年代に入って続々と出版された新編地方志が提供する文献情報を基に、江南地方の県や市鎮レベルの図書館、文書館、博物館を精力的に調査し、『享帚録』等の文集、『陳行郷土志』等の教科書、『滬諺』等の歌謡集、さらに『曚報』等のローカル紙など、従来日本の学界のみならず中国の学界でもほとんど知られていなかった文献を発掘した。また氏が独自に有する人的ネットワークをいかして個人が私蔵する抄本や油印本などの未刊行書を入手し、それらを自らの研究に積極的に用いた。その結果は大陸をも含めた中国近代史研究の史料利用のあり方に一石を投じることになった。

第二は、そうした《郷土史料》を活用することにより、中国の地域社会の諸状況を細部にまで具体化して描くことに成功したことである。従来の中国近代史研究においては地域を対象にする際、史料としては『申報』等の大新聞や編纂物として印刷刊行された地方志に頼らざるをえず、それゆえに地域といってもせいぜい県レベルでの状況を明らかにしうるにすぎなかった。その点では日本近代史における自由民権運動や地方自治制の研究が地方ごとの相違を伴った詳細な実態を鮮明にしているのと対照的であったといえる。それゆえに氏が始めた《郷土史料》の綿密な検討は中国近代史研究においてはまさに画期的なことであり、今後の研究のあり方に多大な影響を及ぼすはずである。

第三は、二〇世紀初頭の地域エリートの活動に対し、これまでの中国近代史研究が評価してきた「近代化」を基軸とする新旧対立の構図ではなく、むしろ「中国独自の発展の尺度」から理解することをめざした点である。また、多くの関連研究に目配りした興味深い指摘が随所に見られることも評価できよう。そこでは地域エリートの郷土教育や社会教育の活動が具体的に示され、夫束問題などの地域紛争のドロドロとした状況のリア

リズムが再現されている。国家建設という「近代化」＝制度化において新しく出現した自治推進派のエリートたちもまたその装置を「地域戦略」の手段として用いたに過ぎなかったという指摘は、中国の「近代化」を考えるうえで注目すべきものといえよう。

論文の問題点と課題

次に本論文の問題点と課題について若干触れておきたい。

本論文には《郷土史料》を活用し、それに依拠して地域エリートの実態に迫ろうとする点に特徴がある。しかしその分、氏の事実認識においても《郷土史料》を書き残した彼らの見解に依存する傾向があり、結果として叙述が一方に偏りがちであり、彼らと対立する側の真の姿が見えにくいといった印象を与えている。また《郷土史料》のなかで活躍する「善玉」の地域エリートにおいてもその属性として「土豪劣紳」的な側面、すなわち「悪玉」的な側面を必然的に持っていたはずであるが、こうした側面への言及が乏しい点は否定できない。

「行政機構の末端をエリートが自らの主導の下に確保すること」や「地方の要請を聞いて上位の行政当局に陳情することを可能にすること」など、二〇世紀初頭の地域エリートの行動として示した諸特徴が明清時代における伝統的な郷紳のそれとどういった点で異なるのか、いまひとつ明確でない。同様に地域エリートがめざした郷から県、省、国家へと同心円状に秩序を回復して、やがては全体秩序の回復をはかろうとする発想は、中国の伝統的な知識人が持つ「修身、斉家、治国、平天下」の儒教観念とどこが異なるのか。この点についても議論が尽くされていない。

地域エリートの秩序観についての分析は本論文での主要なテーマであるにもかかわらず、それが初歩段階で終わっている点が惜しまれる。本論文の随所に提示された議論、すなわち同心円状に秩序を構築していくといった考え方、個人と合群、「私」と「公」の議論、秩序の中心を民衆の中に見出すか否かという論点、法理情と情理法の対比など、いずれもこれを出発点としてさらなる議論の展開が可能となる諸問題であるが、それぞれについての深い分析が果たされていない結果、本論文全体の議論が収斂していく中心をあいまいにしている。本論文が地域エリートの思想史研究として深化するためにも克服すべき課題であると思われる。

地域エリートの対民衆意識を考察するのに「竹枝詞」という歌謡を用いた新しい手法は大いに評価できるものの、本論文ではこうした史料を引用しただけにとどまり、その内容に立ち入っての検討は十分ではない。これを真の意味での史料として活用するのであれば、詞の正確な訳出だけでなくそこに含まれた真意の読み取りなどが必要であり、これもまた将来に残された課題である。

本論文のように、地方自治を焦点に据えて清末から中華民国に至る二〇世紀前半の時期における地域エリートの性格を検討する場合、国民革命を経て一九二〇年代末に及ぶマクロな政治

変動とそれに伴う地域エリートの変化を視野に入れる必要がある。これに対し、氏は、党を媒介として社会統合を執行する「党国体制」を地域社会に求め、やがて国民党の支持層を形成していく、いわゆる新知識人層と、なおも《郷土》を基盤として秩序を組み立てていこうとする本論文で主に論じた地域エリート層とは基本的なところで共通性を持っていたのではないかという興味深い指摘をしているが、この実証もまた今後の課題であるといえよう。

以上のように、本論文にはまだいくつかの課題が存在する。しかしながら、本論文の提起した多くの論点が従来の中国近代史研究に新風を送り込んだことは疑いなく、それは十分に評価に値するものであると考える。氏は今後もなお《郷土史料》の収集に努めていくという。その精力的な活動は氏の堪能な中国語学力と物怖じしないタフな性格とあいまって、これまで何かと制約を伴っていた外国人による中国研究の限界を突破できるのではないかという期待を抱かせる。いずれにせよ本論文は新時代の日本の中国近代史研究を背負って立つ有望な若手研究者の一人が著した魅力あふれる研究である。それゆえ審査委員一同は本論文が博士（史学）の学位を授与するに十分ふさわしいものであると判断する次第である。

論文審査担当者

主査　慶應義塾大学文学部教授・同大学院文学研究科委員　山本　英史

副査　東京大学大学院人文社会系教授　岸本　美緒

副査　東京学芸大学教育学部助教授　田中比呂志